

体育は何を教える科目なのか

— 体育の自由記述式授業評価を手がかりに —

林 郁 子*

What Subject is the physical education ?

— To find the answer by asking students about the impression
of the physical education —

Ikuko HAYASHI*

はじめに

本大学の健康・スポーツ科学論を担当させていただいているが、この科目においては普段何気なく使っていて知っているけれども、あまり深く考えないこと、例えば、「体育とは何か」「スポーツとは何か」について徹底的に考えるという主旨で講義を展開している。このようなことを通じて、体育とはいったい何を教える科目であればよいのか、スポーツが私たちにとってどのような意味があるのかなどについて考えている。けっして一つの答えを求めるのではなく、徹底的に考えることによって当たり前存在していることに興味を持つこと、ひいては「からだ」について新たな認識を持ってくれることを期待して行っている。

その中で、小学校、中学校、高等学校においてその存在に疑問を持つことなく受けてきた体育について評価をする講義を行った。この質問は、体育が学校教育の中でどのような意義があって存在しているのかを考えるきっかけになることを期待して行ったものであるが、この評価には、12年間の体験に基づく、様々な感想、意見が述べられ、体育の現状を垣間見ることができる記述が多かった。すべてを表しているものではないが、体育が学生にどのように受け入れられ、考えられているかがわかる貴重な資料と感じられた。またそこには体育の進むべき道を模索する一助となるのではないかと思える回答も多くみられた。

* 大阪電気通信大学 非常勤講師
Osaka Electro-Communication University

そこで本研究では、これらの回答を分析し、今体育が抱える問題を探り、体育は何を教える科目なのかということを考えてみたいと思う。

第一章 調査結果の分析

(1) 自由記述式感想文の方法

2004年4月30日の大阪電気通信大学の講義において「小中高で実際に受けた体育について採点し、その点をつけた理由を書いてください。」という質問をし、得点をつけ、自由記述でその理由を述べてもらった。資料1がその質問紙であり、資料2が回答の一覧である。そして、この結果を提示し、なぜこのように思うのかを学生相互が追加質問する形で、記述内容を吟味した。

当日の受講者は72名であり、男女比は男子71名、女子1名であった。

(2) 全体的な傾向

表1 点数別分布

点 数	人 数 (人)	割 合 (%)
10 点 未 満	1	1.4
10 点 台	0	0
20 点 台	1	1.4
30 点 台	4	5.6
40 点 台	6	8.3
50 点 台	11	15.3
60 点 台	12	16.6
70 点 台	15	20.8
80 点 台	8	11.1
90 点 台	8	11.1
100点	6	8.3
総 数	72	100

表1から分析すると、50から70点台に5割が占め、高得点で評価する学生が過半数を占めている。このことから判断すると、実際に行ってきた体育について、概ね合格点をつけているといえる。しかし、全否定、全肯定をするものではなく、何らかの問題点を指摘しながらの採点だといえ、その結果これらの指摘の中には、現在体育が抱える問題点が反映していると考えられる。そこで、点数を決定したと思われる理由を学生の自由記述から抽出し、14項目に分け、どの程度に分布するかを表2にまとめてみた。

表2 評価項目別分布表

	10 点 未 満	10 点 台	20 点 台	30 点 台	40 点 台	50 点 台	60 点 台	70 点 台	80 点 台	90 点 台	100 点
① 得意（好きな）種目がある									1	1	
② 不得意（嫌いな）種目がある						1	1	1	2	1	
③ 種目に不満がある	1		1	4	2	5	2	5	2		
④ 人間関係を円滑にする					2	1	2	5	6	6	3
⑤ 人間関係を悪くする					1		1	1			
⑥ 人間性の向上に役立つ							2	5	6	4	4
⑦ 体を強くする						2	2	5		4	1
⑧ 体を悪くする	1				1		1				
⑨ 達成感を感じる						1	3	2	2	5	1
⑩ 楽しい					2	1	2	5	2	2	1
⑪ 楽しくない				1							
⑫ 気分転換に役立つ							2	3	2		2
⑬ 評価方法に不満がある			1	1	3	3	2	1	1		
⑭ 授業方法に不満がある				1	3	5	9	2	4	2	

表2から分析すると、高得点学生群（50点以上）は、人間関係を円滑にする、人間性の向上に役に立つ、体を強くする、達成感を感じる、楽しい、気分転換になるという項目を挙げている。しかし、低得点学生群（50点未満）はこの項目を挙げるのが少ない。このことから、これらの項目によって、体育に高い授業評価をしているということが言える。

しかし、種目に不満があるという項目は高得点学生群、低得点学生群にかかわらず分布が見られる。これは、体育で行われていた種目に必ずしも満足しているわけではなく、なぜこの種目をしなければいけないのかという疑問を持ちつつ、その疑問を解消することなく、行っていたことが伺える。さらに、成績のつけ方として表れる授業の評価の仕方、授業の方法に対しても同様の傾向があり、点数に関係ない分布が見られる。つまり、今回の調査で高い点数をつけていても、これらの項目は体育の授業において改善する必要があると考えているものであり、今後の体育のあり方に貴重な示唆を与えてくれるものと考えられる。

楽しいという項目については、具体的に楽しいという評価を書いているのは高得点群の学生に多く見られるが、楽しくないという項目はほとんど記述されていない。楽しくないという抽象的なことばではなく、具体的な原因を挙げ、点数評価をしている傾向があるといえる。楽しい、楽しくないという抽象的な表現は目に見える形で表すのは大変難しい。なぜならば、楽しいという

感覚は、主観的判断であり、個人差があるからである。しかし、多くの記述の中には、楽しさや楽しくないと思うことを導き出す要素が多く見られ、これらを判定基準にしていると考えられる。つまり、楽しい、楽しくないという感覚はこれらの項目が複合的に作用したときに感じられるといえる。

以上のような傾向から、複合的に構成されている楽しさを導き出す要素から体育を分析する可能性が見出せる。そこで、表2の中から楽しさを構成している要素を、技術達成感の実感(表2の中の⑨ ⑬ ⑭)、種目の好き嫌い(表2の中の① ② ③)、スポーツの持つ特性(表2の中の④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑫)の三点に集約し、現在行われている体育を分析することにする。

(3) 技術達成感の実感

全体的な傾向から判断すると、体育はスポーツ技術を獲得するために有効で、なにかができるようになったと感じた経験をした場合は高い評価をしている(資料2の中の^{30) 31) 53) 58)}など。以下、カッコ内の数字は資料2の中の項目を示す)。体育の場合は、できる、できないが露骨に表れるものである。そのため、できなかったことができるようになることは達成感が高く、体育を好意的に判断することになる。その結果、からだを動かすことを楽しいと感じるようになる⁶⁸⁾。しかし、一方でできないことに対するコンプレックスは他の教科に比べ、はっきり結果が現れるので、精神的なダメージが大きい^{7) 10) 20) 45)}。このような状況は人間関係をも脅かすことになりかねない³⁴⁾。また、順位があるため、結果があからさまになることも同様のコンプレックスを引き起こし、評価は低くなる。これらは体育を評価するうえで、判断基準の大きな要素となることは間違いない。この点を改善するため、体育祭、運動会で、徒競争に順位をつけないという傾向にあるが、これは、できない子ども、学生に対しての配慮とされるが、現実には何の解消にもなっておらず、かえってできないこと、速く走れないことに対するコンプレックスを助長するとともに、速く走れるという才能の芽を摘む結果となっている。また、毎年実施されるスポーツテストの結果が、文部科学省から体育の日に発表されるため、どうしても教師や指導者の目安と判断され、一定の基準に技術を持っていくとする傾向を生む原因になっている。

平等に評価することや一定の基準に体力や技術を持っていくことは目標を持つことができ、達成感を持つ場合もあり⁵⁰⁾、重要なことではあるが、ひとりひとりの持っている力は違うものであり、その差異を認めることが大切なのである。この歪みが学生たちのことばに表れていると言えるだろう^{3) 10) 23) 53)}。これは、体育の授業がどのように進められてきたかが垣間見られる。できる子どもはどんどん技術を獲得していくが、できない子どもは置きざりにされているという状況にあることを示していると言えよう。またこのような状況はできないと感じている本人ばかりでなく、周りにいる学生も決して好ましい状況であるとは感じていない²⁹⁾。このような背景が、達成感をもたらすことを疎外し、授業評価に大きな影響を与えていると言える。できる、できないで成績をつけるのではなく、自分の力を試す⁴⁵⁾という評価の必要性を述べていることから、

成績のつけ方は、達成感に大きく影響しているといえる。技術獲得の差は、授業において差が出るのではなく、先天的なもの、体形などによって大きく差が生じていると感じている学生が多い⁸⁾。そのため、一定基準の到達度に対しての評価については疑問を感じる学生が多いことがわかる。どのくらい努力したかを評価の対象とすることを望んでいるが、それを評価することは難しいことであると考え、点数化しやすい他の教科のような評価は必要ないと考えている学生もいる¹⁷⁾。このような結果から成績のつけ方が、達成感を持つことができるかどうか大きく影響しているといえる。

以上のことから、からだを使って行う体育は、技術の獲得、成績のつけ方、指導法によって、達成感の感じ方が大きく変わってくるのが推察でき、体育の授業の評価に大きく影響していることがわかる。

(4) 種目の好き嫌い

不得意な種目に対しては楽しいと感じることは少ない。前述したように、できなかった種目において技術を獲得できたな、できるようになったなと実感できたときは達成感とともに、楽しさを実感できる場合があるが、不得意な種目では、なかなかそれは期待できない。嫌い、不得意と感じる場合、なぜ、この種目が体育の中にあるのだろうと思う傾向がある。例えば、マラソンは何の意味があるのか⁴²⁾、また逆上がりができることはどんな効果があるのか⁸⁾という疑問を持つ学生がいる。学習指導要領の中でそれぞれねらいが述べられ、どのような意図を持っておこなわなければならないかということは示されているが、教師から生徒には伝えられず、一定の基準に到達することばかりが強調される結果となり、嫌いな種目をつくることになる。様々な指導法が検討され、だれにもできる方法が研究されているが、まだまだ多くの配慮が必要だということが感じられる。

このような状況を解決する手段として、種目を選択にする¹³⁾、能力別に行う²³⁾、自由にさせる⁵⁷⁾、などを上げ、これらが取り入れられたら体育の授業に対する評価は上がると考えているように思われた。

しかし、ここで注意しなければならないことは、時期に応じた反応の違いがあり、小学校のような成長期や思春期を迎え、からだの変化が生じる中学校、高校で考え方に違いがあると思うが、この調査ではこの点について細かな限定をしていないので、種目は選択がいいと述べている意見にも、漠然としたイメージで回答していることが予想される。最初から選択にするのではなく、ある程度の年齢がきたら、種目を選択にし、自ら授業を組み立てることができると楽しくなると考えていると判断したほうが適切かと思う。しかし、なんでも自由にすることが楽しさに結びつく点には注意が必要であると指摘する学生もあった³²⁾。

多くの学生が「自由」ということばを書いているので、「自由にする」ということばの裏には、「体育はやらされている、強制されている」と感じているのかという思いが湧いた。そこで、グ

ループ討議で、「体育の授業は強制されている感が強かったか」という点について意見交換をし、考えてみた。

その中から出てきた意見を集約すると、体育に限らず、どんな科目でもそのような傾向はあるので、特に体育だけがというわけではないこと、そして、どんなことでも好き嫌いがあるが、好きなことばかりができることがいいわけではなく、我慢することを学ぶことも大いに意義があるという意見がグループのまとめ意見として出された。この傾向は、資料2にも表れている^{32) 59) 71)}。楽しさとは、苦しみがなく、自由に行動できることと考えていること傾向がある。そのため、自由にできることが楽しさの基準になっている。束縛されることなく自由にできることが楽しいと考える風潮は特に体育に限ったことではなく、社会全体がそのような風潮にある。戦後の民主教育が実施される中で、あまりに自由が強調されたためであると思われるが、自由にはそこに伴う責任や忍耐、守らなければならない約束事が存在していることを忘れがちである。体育では、苦しむことなく、簡単に技術が手にいられることばかりではないが、社会においてもそれは同様である。その点については、自由がないとマイナスとして評価する学生もいるが、そこを乗り切ることによってその後の人生にプラスとなると考える学生もいるのである。

これらから、やらされているという感覚は持っているが、それが体育特有のものではなく、生きていく上で必要なものであり、他の教科にもあると考えているといえるが、やはり、嫌いな、不得意な種目を実施しているときは、やらされているという感が強く、体育に対しての評価は低くなり、楽しさの実感を妨げているといえる。しかし、それは、今回の採点において、各得点に見られる判定基準であるという特徴がある。

以上のことから、体育で行われている種目は体育を評価するときに大きな影響を与えているといえる。

(5) スポーツの持つ特性

一般にスポーツをすることによって、健康が保持され、青少年には成長の助けになるばかりでなく、新たなスポーツの技術を獲得することによって、生涯を通じてスポーツをする楽しさを実感できるようになる。また、ストレスの解消になり、気分転換におおいに貢献するといわれている。さらにコミュニケーションを図る手段としても有効に働き、仲間作りなど人間関係を円滑にしている。そのため、このような点と結びつく、体を強くすること、競い合うこと、人間性の向上、人間関係の育成、ストレス発散、気分転換などのことばを使い採点している学生は、高い評価をしていることは表2からも明らかである。また、このような高い得点を出している学生は、これらの特性を複数挙げて答えていることも特徴として挙げられる⁶⁹⁾。

この中からいくつかの項目を詳細に検討してみる。人間関係を育むという項目を挙げている学生は、楽しさを実感していることが多い。スポーツをすることによってコミュニケーションがとりやすくなり、仲間ができ、新たな人間関係を育むことができたと感じ、日常生活にも良い影響

を与えていると感じている^{68) 69)}。また、競い合い、協力し合うことがスポーツを行う中で体験でき、将来社会に出て役に立つと思っている⁶³⁾。このような意見や感想を持つ学生は、体育は体を強くする、鍛えることができると思うばかりでなく、からだを動かすことが大切で、楽しいと感じている^{64) 66) 67)}。また、机に向かった講義が多い中で、からだを使った授業はストレスの発散になり、気分転換になるばかりでなく、新たな仲間作りに大いに貢献していると感じている⁷²⁾。これは、スポーツを行うことは、ただスポーツの技術を獲得するだけでは成り立たず、スポーツを楽しむためには、そこにいる仲間との交流がなければ成り立たず、この状況は体育の時間ばかりでなく、生活全般についても波及効果があり、人間関係が上手く作用していくことを実感していることを示しているといえる。つまり、それぞれが相乗効果をもたらし、体育の評価に高得点をもたらしているといえる。

しかしこのような側面を持つと同時にこのような側面が逆に評価を下げる基準にもなっている。例えば、競い合うという競技性にスポーツをする人も見る人も興奮し、日常生活を活性化させ、達成感の高まり、次に向かう力となる。しかし、競い合うことばかりが強調されると、結果として、スポーツが持つ特性を味わうことなくスポーツから阻害されたままになってしまい、マイナス面として評価を下すことになる。例えば、速く走れることが評価の起点になり、速く走れなければその恩恵を受けることができない状況を作り出し、体育の授業評価に大きく影響を与えることになっている。

また、コミュニケーションをとる有効な手段であると感じるのは、ごく一部の範囲に限られているのではないかと思える節もある。例えば、卓球の授業を行うとき、一生懸命ラケットを振り、ボールを追いかけているのであるが、他の卓球台から転がってくるボールにはまったく気がつかないのである。ボールをとってあげるという行為がないのである。大勢で授業を展開しているにも関わらず、向かい合っている人、または卓球台を共有しているごくごくわずかな人としか交わりがないのである。まるで個としてしか存在していないかのようである。少し広い空間であれば、声をかけなければ、お互いが結び合うことはできないし、意志を伝えることもできない。しかし、淡々と自らの行動はするが、ほかの人が何をしているかを確認して行動を起こすことが少なくなっているのである。他人と場、空間を共有している雰囲気が感じられないのである。しかし、学生本人は楽しいと実感しているのである。団体で行う体育の授業でありながら、小さな集団でのコミュニケーションのとり方に変化しているのではないかと思える。

本来人間は何か利点があって物を始める傾向がある。そのため、スポーツが外来文化として日本に導入されてから、何か自分にとって良いことがあると期待して広まっていった。そのため、スポーツをすることにいつも何か効果があると期待している。しかしすべて良い面ばかりが存在するのではなく、表裏一体で短所となる部分もあることを認識し、何か効果がなければする必要はないという短絡的な思考回路を作りかねない危険を避けなくてはいけない。このような両面性をスポーツが持っていることを再認識し、授業に取り組みなければいけないことを指摘している

ともいえる。

(6) 分析結果のまとめ

授業評価を高く分析する原点として楽しさを挙げ、それを導き出す項目として三点の項目について考察してみたが、それぞれが関連しあって評価になっていることは想像される。楽しいという個人で捉え方がかなり違うものが判断基準になっていることはその分析に細心の注意が必要であるが、目でみえる部分の充足感ばかりでなく、技術の達成感、仲間作り、ストレスの解消、からだの発達など、心身の満足感を得た場合に評価が高いといえる。逆に、できること、できないことが成績に直接結びつくことから、できなければ楽しむことができず、さらに人間関係をつくる場合にも障害となる場合もあり、評価が低くなる傾向が強い。

しかし、得意ではなかったが、からだを動かすことが楽しく、授業でありながら授業らしさを感じさせないことから、高い評価をする学生があったり、得意と感じながらからだを動かすことになじめなかったり⁶²⁾、団体種目の中に溶け込むことができない友達の存在に気がつき、体育において改善しなければならないと指摘する意見は³⁶⁾、これらの要素は表裏一体の関係にあり、これらが、授業のあり方や、成績のつけ方で二つの方向をもたらし、今回の授業評価に結びついたと考えられる。このような点に注意を払い、授業を展開していくことによって、体育の新たな授業展開の可能性を見出すことができると考えられる。今後の体育を考える際に貴重な意見といえる。これらを真摯に受け止め、更なる改善を心がけなくてはいけないといえるだろう。

第二章 体育が目指さなくてはいけないこと

自由記述に基づく調査から、現在体育が抱えている問題点を指摘した。それには生々しい意見が多く、すぐにでも改善の手段を講じることができるものが多い。しかし、体育という教科でありながら、からだそのものに対する記述が少ないことに不安を持ったのである。体育についての授業評価であるから、当然のこととして対象にならなかったであろうかとも思うのであるが、からだについて関心がないのであろうかという不安はぬぐいきれないのである。

社会では、自分のからだに関心がないわけではない。例えば様々な雑誌ではダイエット、健康食品などの特集が組まれると売り上げ部数が増えるといわれている。健康に良いといわれる運動や食品にはすぐに反応が返ってくる。それゆえ関心がないわけではないのであろうが、そこで注目が寄せられているのは外から見たからだ、人から見られているからだである。たたかれたら痛いと感じるからだである。つまり、存在がじかに見えるからだに対しては関心が寄せられているといえる。確かに食糧事情が良くなり、科学的な研究が進み、体格、体力は向上し、美しくなること、かっこよく見える工夫は多くの人の関心の的になっているが、一方で自分や他人のからだを安易に傷つけ、命の大切さが感じられなくなる傾向も現れてきている。自分のからだを大切に

いとおいしい存在として見つめ、他人の存在を認めて存在するからだではないのである。人は一人では生きていけないが、人と関わりをもつことを無意識の内に避けてしまうからだ作り上げられているのではないかと思うのである。無言の抵抗のようにからだ硬直し、ゆがんだ状況を表し始めている。「ムカツク」「キレル」などのことばでしかからだや自分を表現できないようなからだの危機とも言える状態が噴出してきているのに、このような意識は体育の授業との関連では表れてこないのである。生活指導の場面では問題になることだが、体育そのものの問題にはなかなかならないのが現状であると思う。しかし、体育がもっとからだに注目し、教育の根幹となる部分に関わっていかなくてははいけないと思うのである。

また、体育の実技の授業を行っていると思ふ不思議な感じに襲われるのである。特にここ十年ほどは、以前ならできていたからだの動きを知らずに成長している学生の姿や動きにぎこちなさが感じられる学生をよく見かけるようになったのである。つまり動くことが楽しいと感じたことがないのであろう学生、色々な動きを体験してきていない学生を見かけるようになったのである。動くことを拒否しているかのようなからだが見受けられるのである。その結果、今までならば説明の必要のなかった動きが説明しなければできない、あるいは説明してもわからない学生が増えてきているのである。これは、動くことが少なくなった便利な社会の影響ともいえる。今までならば、特に注意を向けなくても日常生活の中で、あるいは遊びの中から獲得できたからだの動かし方が意識して獲得しなければならぬにもかかわらず、気がついていないのではないかと不安になるのである。このような状態が続くと基本的な動かし方ができないままに体育が展開されてしまう危険性が生じてしまう。スポーツテストの評価などでは表すことができない、からだの動かし方、表現の仕方にもっと注意が向けられないといけないのではないかと思う。

このような危機がからだに迫っているにもかかわらず、からだに注目していないような傾向を不安として感じられるのである。これは体育がからだそのものの教育でありながら、目をそむけてきた結果ともいえる。近代社会が理性中心主義によって動いていたために、科学的根拠がないものには価値を持たず、評価をしにくいところはあいまいなままにしてきたこと、こころとからだを別々のものと考えてきたことによる結果だと思われる。数値に表しにくいもの、ことばとして表しにくいものは評価がしにくいいため、こころを含めた丸ごとのからだを体育の中心に持つてくることは難しいことであったと思う。また、知育、徳育、体育と言われるが、この列挙のされ方は、この三つがそれぞれ大切なもので、欠くことができない教育の分野を形成しているという認識があればよいのであるが、現在の所は知育偏重の傾向が強く、体育に同等の意識を持つことにはないように思われる。そのため学力の低下が叫ばれると、数学（算数）、読解力の向上に目が向けられるのである。からだを持っている力を机上で発揮される脳の支配する面ばかりが強調されている。

しかしからだを動かすことは「からだに覚えさせる」などと簡単に片付けられない、脳とからだを総動員させなければできない高等な技術であり、なんとなく生きているうちに獲得できるよ

うなものではないのである。普段の生活が便利になってしまった代償にからだそのものの動かし方にまで、注意を払わなければならない現実を直視しなければならない。人間の基本であるからだをどこかに置き忘れてしまったような社会が存在することにもっと敏感に反応しなければならないと考える。

社会の中で生きているにもかかわらず、自らのからだや他人のからだを意識することなく、生きているのではないかと思えてくる。人が人として生きていく上には一人では生きていけない。しかし、生きていく上での基本的な動きを覚えず、からだをこわばらせ、人と交わることが少なくなっている学生は、本当にそのような状態を好んでいるわけではなく、そのような状態にからだを置かなくてはならない状況になってしまっていることのほうが重大な問題であると考えられる。このような状態を少しでも改善できるのは体育のあり方であると思う。からだのあり方、付き合い方に目的をもち、いかにからだとかかわっていくかと言うことに具体的な方法を見出すことが体育の目指す所であると考えられる。

おわりに

体育が何を指すかによってしなければならないことが見えてくる。しかし体育は残念ながらいつも世の中の目指す目的的手段として存在することに価値を持つてきた。体育が他の教科と同じように必ず置かなければならない必修科目として学校教育の中に存在する意義を確立しなければならないとききているように思う。そこにあるから存在意義を考えるのではなく、そこになければならない意義を考えることが求められていると思う。

体育はやはりからだを基盤とした教育であると言う認識をもっと持つべきだと思う。人間はからだがあってその存在が認められる。そのからだがおざりにされるような考え方を持った体育が存在するのは残念である。体育はからだを取り扱う教科であることをもっと認識すべきだと思う。私たちのからだはいろいろな可能性を持っているが一人一人違う。違って当たり前なのであるが、なぜか成績を出すためや、一定の到達度をはかるためなど、ある基準に達することに多くの注意を傾ける。しかしこの基準も何を基準に考えているのだろうと思うことがよくある。この思いは、今回の調査の中にも強く表れていた。

このように考えると、体育は多くの局面を抱えた教科と言うことができる。一定の基準に達するような技術を獲得するには何を必要とする必要があるのだろうか、自分のからだはいったい何ができるのであろうか、生きていくためにはどんなからだが必要なのか、そのようなことを考えられる体育が創造できないかと考える。からだがなくして私たちは生きていくことができないと言うことをもっと自覚できるような体育を創造する必要がある。そのためにも、「からだ」がのびのび生きていくことができる、共に生きることができるからだを耕す体育の創造を目指さなくてはならないと思う。個を認めた「からだそだて」ができるよう、教える側にも豊かなから

資料 2 『学校体育を採点する』の回答一覧

点数	人数	評価の基準
10点未満	1	(1) 体を育てるといいながら、運動中に倒れたり、骨を折ったりする人がいる。夏の暑いときに外で何かやらせたり、寒い時期に短パンで走らせたりして、体がつくられるわけがない。何も全員に強制することはない。体育は教養でもあるまいし・・・体育は素晴らしい。全員にやらせるべきだ。そして全員体を壊すのだ。
20点代	1	(2) 身体能力に大きな差が出てきたときに同じ能力を求めるのは無理で、せめて差が出ないように工夫が必要。だがそれが可能かと言うと現時点では不可能だ。身体能力の高い人を基準にしても低い人を基準にしても問題があるため。
30点代	4	(3) 無理やりやらされている感じがするし、自分の好きな種目ができない。個人差のうまい下手で評価され、差別的な要素を持っている。やっている意義があるのか疑問に思った。 (4) 嫌いな種目をさせられ、怪我をしたし、逆上がりができなかった。 (5) 跳び箱をやれとか、マットをやれと勝手に決められているのが良くない。もっと自由な感じがあっていいと思う。点数が付けられるのはできない人にとって嫌だと思う。それだけで楽しむという要素がまったくないのは問題である。 (6) 決められたことしかできない点。運動というのは確かに必要であるが、嫌いなスポーツをしても気分は晴れない。体育というのは「スポーツのルールを守る」といったことを教えるのではなく、「体を動かすことのよさ」を学ぶことだと思う。何事も楽しむことが一番。教育課程の中で決められたことしかできない今までの体育はこのくらいの点数である。
40点代	6	(7) 体を育てると書いて体育だが本当に体を育てているのだろうか。公共の場においてすべての子供に強制するのは良くないことかもしれない。じょうずな人もいれば下手な人もいる。ドッジボールにおいてそれがはっきりする。運動神経のいいやつは独壇場じゃないのか？うまいやつは楽しめ、下手なやつはタイ思いをするだけ。 (8) 体型の理由や遺伝やら何やらで本人にはどうしようもない理由で逆上がりができないとか、何秒以内で走れないとか、与えられた課題ができていのかどうかだけで評価がついてしまうのはいけないと思う。だいたいどんな人でもすべてパーフェクトにできる人はいない。その人の能力に応じた、努力をしているかどうかで付けるべきである。 (9) 全員が同じ種目をするのは、苦手な人にとってはきつい話だ。種目を選べるのは良いが、練習内容が次から次へと変わり、わからないまま進んでしまったが、自分たちで練習内容を考えていけるとやりやすかった。しかし種目が少なかったので、嫌いな種目があたってしまつらい。 (10) 体育は好きなほうではなかった。小学校では、マラソンや鉄棒など、うまくできる人は次のステップへと進めるのに対して、うまくできない人はおいてきぼりになりどんどん置いていかれてしまう。中学校では、基礎的なことを学ばせ、そして実践させるというものだった。そして高校は始めから終わりまで勝手にやれ状態だった。下手な人は何もしないまま試合は終わり、試合中ボールさえ触れないときがあるくらいつまらない授業だった。但しコミュニケーションを図れる体育は楽しい。

		<p>(11) 小学校のときは他の教科と同じような感覚でやっていた。中学のときはある程度自由に動くことができ、そこそこ楽しむことができた。高校のときは授業を計画してできたので体育はそれなりに意味があった。しかし評価の基準が表情をうまく表せない人にとっては、不利だと感じるがあった。</p> <p>(12) 基本的には皆と同じことをやって終わりだった。本当にそれでよいかと思う。なぜなら個人個人伸ばしたい技術や新しいことに取り組みたいと思う生徒も多いのだ。生徒の希望を募っての選択形式の授業をすると良かったと思う。好きなスポーツをやって楽しく仲間とコミュニケーションやスポーツの専門的なことを言い合ってやればすごく楽しくなると思う。</p>
50点代	11	<p>(13) 小学校はだれでも参加できるような工夫がされていたが、中学校ではできない子とできない子に別れ、できない子にとっては動かないことが、邪魔にならないことが体育であった。これでは学校体育は何のためにしているかわからないし、したくもないと思う。これでは団体行動ができないだけでなく、将来運動もしたくなくなると思う。</p> <p>(14) 中学ではすぐ試合をし、先生も何も言わなかったので、あまり授業という感じがしなかった。高校では団体行動をどう取るかが大切だが、自分たちが好きなようにできた。</p> <p>(15) 施設や用具がないため、できないスポーツがある。基本的に何をやるか決まっている。もっと自由に体育の時間にどんなことをやるか自分たちで決められたらいいと思う。</p> <p>(16) 小学校では単純に楽しんで体育ができたが、中高に進むにつれ、自分には到底真似できない鉄棒などの器械体操ができる友達を見るとマイナス思考になった。</p> <p>(17) 外で体を動かし、中で柔軟などをするのはあまり普段動かさない筋肉を動かすことができるのでいいことだと思うが、それを成績にする必要があるかは疑問である。体育はあってもいいが、成績の付け方は変えたほうがいいと思う。</p> <p>(18) 「運動をする」という点から重要だし、体育の価値の80%を占めていると思うが、種目が限定されているために体育嫌いを作ってしまう。運動すること自体を嫌いにしてしまう原因を作っている。「運動は楽しいもの」というのを最初に感じさせることが大切だと思う。運動すること自体を嫌いになってしまう原因のひとつが体育にあるような気がしてならない。</p> <p>(19) しんどい種目もあるけれど、いろいろな種目ができ、チーム種目をするだけで仲間作りができる。好きでも嫌いでもない。</p> <p>(20) 体育は自分の好きな種目だけをするのではないから、嫌いなこともある程度するが、個人差があるので、できる、できないを区別するのは正しくない。できない側にまわったことがあるが、正直あんな気分は味わいたくない。だから体育をやっているときは常にそういう人がいることを頭にいれないといけない。</p> <p>(21) 好きな人と嫌いな人がいるので50点を付けた。点数の付け方が先生によって大きく違うので、不公平といえば不公平かなと思う。</p> <p>(22) 強制的にさせられていたし、技術ばかりが重視されていた。高校では自分たちで考え、行動することができ、技術よりもやる気が重視された。競技専門の先生がいて技術向上になった。</p> <p>(23) 人それぞれ個人差があるので、クラス皆で同じ競技のまったく同じ内容をやるのはおかしい。能力に合わせたクラスわけ等をして、授業を進めれば、みんなの能力も上がるし、楽しい授業になると思う。身体的に体育をやるのが無理な人に皆と同じ体育させるのはおかしいと思う。</p>

60点代	12	<p>(24) 皆ができることにこしたことはないけれど、わざわざ時間を割いてまですることはないと思う。(逆上がり、一輪車) できる所までやらせて、後は生徒に任せて先生は見守るとするのが良いと思う。</p> <p>(25) 学生がやらされているものだと思う。あらかじめ用意された種目を順にやらせ、与えられた種目ができれば“良”できなければ“不良”ときわめて単純な判断。得意不得意があるにもかかわらず、そういう点はまったく考慮に入れず、努力してできるようになってもあたかも当然のように言われるのは悪い点。社会的なルールを知るもしくは従う、そういった社会で生きていくうえで必要な筋力を身につける、または他人とのコミュニケーションや思いやりといった社会全体としてではなく、個人と個人もしくは小集団同士のコミュニケーションの方法を学ぶ点が良い点。</p> <p>(26) マラソン、サッカー、バスケットの3種目の連続で、面白みがなかった。体育のときは個人差が大きいので、サポートが必要であるが・・・</p> <p>(27) 自分は体育が好きである。勉強ばかりでつまらない日も体育があると元気が出るほどの体育バカである。体育が嫌いな人は運動が苦手な人、集団になじめない人だが、その人たちに無理に強要するのが気に入らない。選択にすべきである。学校体育が必要かどうかを疑ってみては。</p> <p>(28) 体つきがあまりよくなかったので体育にあまりなじみがなかったが、高校生になって体を動かし、汗を流すことが好きになった。バスケに熱中したときの快感は忘れられない。</p> <p>(29) 体を動かすことが第一の目的であろうが、競技のルールや泳法などをろくに教わっていない。怠けている生徒に対して何かしら促すこともない。運動ができる生徒は別段なんとも思っていないだろうが、あまりできない生徒は楽しくない。「ただ機械的に体を動かすだけの体育」という風感じていた。</p> <p>(30) 友達を作るひとつのきっかけにもなるし、友達との仲も深めることができる。しかし苦手な種目をしていても楽しくない。もっと選択できるようになったら、楽しく過ごせると思う。</p> <p>(31) 目的を達成する能力を養うという点ではいいが、できるまで延々とやらせる点は悪い。でもノルマを達成したときの達成感を得られたのは非常にうれしかった。</p> <p>(32) (小中高の体育を通じての経験から) 嫌なことは逃げて好きなことだけやっていたら、これから社会に出てやっていけないから嫌なこともやれる大人になるために学校体育は必要だと思う。</p> <p>(33) 小学校の体育は運動神経の良し悪しで決まっていたが、中高になると点数の付け方が授業やスポーツに対する打ち込み方ややる気を重視するようになったこと。</p> <p>(34) 体を動かすことが苦手またはインドア的な人には適度な運動でからだの基礎代謝を高め、人付き合いが苦手でも、コミュニケーションをとりやすくなるし、向上心も生まれるが、反対に勝敗にこだわりすぎると、自分のせいにされ、陰悪な雰囲気になる。</p> <p>(35) 中高の体育は何か勉強という感じがしてイヤだった。体育とは勉強の合間にあって体を動かして頭をリラックスさせるものだと思うているが、体育を勉強と見ているようで、教師たちに無理やりさせられてという感じがする。</p>
------	----	--

70点代	15	<p>(36) 体を唯一動かす場所であった。すべての人が学校体育は必要だとは思っていないと思う。からだを動かすのが嫌いな人、体育嫌いな人も絶対いるので。</p> <p>(37) 小中高と発展途上の体で運動しないしているとどうなったかわかったもんじゃない。しかし同じ種目の繰り返しではなく、色々な種目を選択できるようにしてほしい。また、勝敗にこだわりすぎ、できない子を責めているのをほったらかしにするのはやめたほうがいい。</p> <p>(38) 学校体育は友達が一番できやすい。息抜きに体を動かさせたことも良かった。水泳は、水は冷たいし、泳ぐのはしんどかった。</p> <p>(39) 小学校では基本的な運動ができるようにするために必要。中学の集合練習は厳しかったのでなくてもいい。自分たちで種目を決めてできたので必要。</p> <p>(40) 勉強の合間の息抜きみたいに体を動かすのは楽しいが、決められた種目をするのは、自由時間がなくてちょっとつらい。</p> <p>(41) 小学校は怪我が多かったけど、楽しかった。中高では、楽しいだけではなく、厳しい体育であったが、体を鍛えるだけではなく、心の面など、内面も鍛えられ、すごくためになっていると感じる。</p> <p>(42) マラソン大会はなぜするのかかわからないが、様々な種目ができ、中レベルくらいまでになれた。友達も増えるし、知っている友達の新しい一面も知ることができた。</p> <p>(43) ちゃんとしたルールに沿ってスポーツができた。体を動かすことは好きだったが、マラソン大会やタイムを計ることで順位を決めるのが嫌だった。</p> <p>(44) 体育を授業の一環としてではなく、イベント的にやってくれた先生がいたこと。尊敬に値する先生でした。</p> <p>(45) 小学校時代逆上がりと跳び箱の授業で、できない子達にできるまでさせていたが、みんなの前で無理やりさせることによって恥ずかしさだけが残る形になり、嫌であった。中高では、できる、できないだけではなく、自分が今どれだけの力があるかを試す時間だったので、嫌だと思うことはなかった。</p> <p>(46) 体を動かすことが楽しいことであるということ学ぶことだ。</p> <p>(47) 団体行動をすることの楽しさやいろんな人の意見や自分の悪いところを知ることができた。社会に出るまでの練習になる。</p> <p>(48) しんどいスポーツや面白いスポーツなど、ほかの人と一緒にプレイしたり、ほかの人がどう動いたか見たり、外に出て実際に学ぶことができたと思う。いい先生に出会えたことである。</p> <p>(49) 小学校は体を鍛えると共に友達作りに重点が置かれていた。中学校は個人の能力を重視する傾向にあったため、体育に取り組む姿勢が変化した。高校は個人能力重視にリーダーシップや協調性といった社会に出たときに必要にされるスキルも見られていたと思う。割と楽しくやっていたというイメージが強いが特に好きな科目というわけではない。</p> <p>(50) 体育というのは先ず運動をするということが目的であって、楽しくできたらいいと思う。一人一人身体能力が違う中で評価するのはおかしい気がする。一人一人が楽しんで運動できることが重要である。</p>
80点代	8	<p>(51) 小学校は好きなものが多く、さらに中学になって体力テストという自分に興味のあるものが増え、よかった。高校では保健的な勉強が増え、集団訓練という集団の中できちんと動けるかという自衛隊並みの大変疲れる体育であったが、後に自分にプラスになった。</p> <p>(52) 体育で体を動かすと勉強の疲れもいくらか癒される。確かに体育では自分の不得意なものも出てくるが、それを仲間と頑張ろうと思える。普段あまり周りと接しない私が周りと打ち解けることができる時間。</p>

	<p>(53) できるようになり得意になってくると体育は楽しいので授業に取り入れてもいいが、体育が嫌いな人、苦手な人に対する目線は入れておくべきだ。</p> <p>(54) 運動が苦手な子でも積極的に参加しようと思うような内容に努力すべきだ。苦手な子は参加してもまったく動かないなどの問題が生じやすい。だれも好きになれそうにない冬のマラソンはやめたほうがいい。体育の授業が嫌いになれば、その先ずっと運動嫌いになる恐れがある。体を動かすことの喜びを教え、スポーツを通じてお互いに協力し合うことの大切さを学ぶことが大切である。</p> <p>(55) 運動ができるかではなく、運動に取り組む姿勢を見る授業だと思う。運動が不得意な人には別の評価方法が必要である。しかしその場合感情が入ってくる。人の本質を見るという点で素晴らしいと思う。しかし人によって人間性の好き嫌いが出てくるので、その辺が曖昧になってくる。人間の本質を見るという点では良い授業だと思う。</p> <p>(56) 机で文字を書くという肩の凝りそうな授業に対して思い切り体を動かし、たまったストレスを発散できる。しかし嫌いな種目などは気がめいてくる。</p> <p>(57) 小学校では体を動かすことの楽しさ、その競技内で協力することによって協調性を養う、そしてルールを決めることにより社会になじみやすい精神を培う。しかし小中になると「～ができないとだめ」といわれることが多く、「楽しさ」を学べなかった。体育教師が強要するのではなく自由にやらせるべきだ。</p> <p>(58) 走るのは遅かったし、運動会でも遅かった。でも体を動かすことがそのうち慣れてきたのか、だんだん楽しくなってきた。楽しんでるうちにだんだんできるようになったし、友達の輪が広がったから、小さいときからの体育は大切だと思う。自由度が少なかったのが難点。</p>
90点代	<p>8</p> <p>(59) 時間割というやり方からも、やらされているという印象を受けがちだが、そこを我慢するのも教育といえる。好きなことばかりが授業ではない。他者と比べるということも成長を促すためには大事なことなので、人と競い合うことを知る良い機会。体育が余り得意でない子には嫌われ方も大きくなるかもしれないが、将来を見据えた上では大事なこと。人間性を育てるということでスポーツをしたら良いとは言い切れないが、健康面でも体を絞っておくのはいい。自己管理を覚えるという意味でも必要。</p> <p>(60) 体育はその名の通り『体を育てる』で小中高は人として体が育つ時期なので、体育をすることによって強く丈夫になると思う。勉強は一人でもできるが、体育で皆と運動などをして、人とのコミュニケーションのとり方を学ぶこともできる。こういった点でも体育も勉強である。</p> <p>(61) マイナス点は精一杯頑張っても伸びなくて途中であきらめる人や、体育なんかまったく興味がない人がいること。体育がなかったら汗はかかないし、新たにクラブ活動に参加するチャンスがない。椅子に座っていることだけが勉強ですかと言いたい。</p> <p>(62) けっしてスポーツは得意ではなくむしろ苦手なほうのだが、体育は楽しかったし好きだった。体育は体を思い切り動かして楽しむ授業なのに授業と感ぜせないのがいいと思う。</p> <p>(63) 運動会、記録に向上によって負けず嫌いになることだと思う。一人でするのではなく、あいつに勝つてやろうとか、もっと良い記録を出すためには授業で競う合うことが良いと思う。負けても次ぎ勝つてやろうと一人ではなく、皆で競う合うほうが喜びもひとしおである。この繰り返し色々なことに目が向き、なんでも挑戦していきたくなる。</p> <p>(64) 外で遊ぶことが少なくなっているのので、体育で体を動かしてスポーツをすることの楽しさを教えるべきだ。しかもスポーツすることで友達と競い合って、一緒にやっていくことで人間が成長すると思う。無理にやらせることはよくないが。</p>

		<p>(65) 体を動かすことは楽しいし、体育が好きだから。先生のやり方にも大きな違いが出る。出来る子とできない子の差を縮めることはできないが、それなりに頑張れる環境をつくってあげることが大切。</p> <p>(66) 集団行動やチームプレーができるスポーツをすることで社会に役立つことをしている。クラス全員で結束し行う運動会は仲良くなれる機会である。冬のマラソンは寒さや風邪の抵抗力を付けるし、水泳は体を冷やし、もしもの場合の役に立つ。今の学校体育は“楽しく” “役立つ” 体育であり、自分にとっては印象深い教科だった。</p>
100点	6	<p>(67) 体育がなければ外で走ったりする機会がないだろうし、好きな人はストレスの発散になるし、嫌いな人もストレスがたまるかもしれないが体は強くなる。友達ができたり、対抗意識ができたりと、学校では一番楽しく、人生の中で一番意味のある授業だと思う。</p> <p>(68) 学校の友達とみなでスポーツをして、一緒に汗を流せるのでとてもいいと思う。コミュニケーションも取れるし、人間関係の悩みも解決できる場合がある。</p> <p>(69) 体を動かすことは必要だし、チームを組んでするので、話す機会が増え、友達を作る機会が一番ある。共同生活とまではいかないが、人と争うこと、助けることなど生きていく上で、大事なことがたくさん入っていると思った。</p> <p>(70) 体育が好きです、というか勉強するより動くほうが好きだから。クラブでは、動くのが嫌になるほどであったが、最後までやった感動がとてもよかったし、動くことはやっぱりサイコーと思った。</p> <p>(71) 生徒が受動する立場で、何をするかは先生が決めるというシステムで、どこか縛られているようで窮屈な感じがするが、それでいいと思う。生徒が自由に選択するシステムに変えると危険とは知らずに怪我をするかもしれない。</p> <p>(72) 初めて公式を習ったり英単語を覚えたりするよりも体育は簡単である。しかも溜まったストレスを見事に発散できる。心と体がリフレッシュされて気分が良くなり、集中できるようになる。学生が勉強で心身を削られているときの体育の効果は100点満点である。</p>

主な参考文献

- 1 竹内敏晴 『ことばが劈かれるとき』 筑摩書房 1988
- 2 竹内敏晴 『教師のためのからだとことば考』 筑摩学芸文庫 1999
- 3 竹内敏晴 『癒える力』 晶文社 1999
- 4 三井悦子 「スポーツする身体」の可能性とその現代的意義
スポーツ史学会研究成果報告書 2003
- 5 山本徳郎 『考える人間は墮落した動物?!』 山本徳郎教授小論集 奈良女子大学文学部
人間行動学科 スポーツ科学講座編 1998
- 6 久保健他 『「からだ」を生きる』 創文企画 2001
- 7 松井洋子 『からだで、おはなし』 太郎次郎社 1994
- 8 斎藤 孝 『身体感覚を取り戻す』 NHK放送出版協会 2000
- 9 池田晶子 『新・考えるヒント』 講談社 2004
- 10 甲野善紀 『表の体育・裏の体育』 北神社 1986